

す

こしでもキレイに見せなきや  
と、メイクに励む日々である。

メイクでも特にまつ毛を上げるときには気合いが入る。でも、短い・剛毛・下向き。日本人特有のまつ毛はどういじっても、外国人形のようなクルンとしたまつ毛にはならない。

「それが大問題よ」とうち明けたら、「ウチの弟ときたら、この姉には似ずに」と、A子が秘話を披露した。

8つも年の離れた弟だそう。そのカレが、長くてクルンとした、「ビューラーいらずのまつ毛」

をしていると、羨ましいような、悔しいような話なのである。

「私が小学2年、3年だったかなあ」  
A子は幼い日を思いだしながら言う。弟は伝い歩きをはじめたばかりの赤ちゃん。母親と一緒に朝食を食べていた。そのころ弟の朝食はシラスかけご飯が定番。「カルシウムが一番」という親心でしょうね。

母親がシラスののったご飯をスプーンですくって、口にもっていったそのとき、「クシャン」とクシャ

ミした。クシャミの風圧でご飯の上のシラスが四方に舞い上がった。

「次の瞬間」と、A子は講談師のようである。

思いもよらないことが起こった。母親がわが子に目を向けると……。

「なんと宙を舞ったシラスが一匹、まつ毛にちょこんとのついていたよ」

テレビでまつ毛にマッチ棒をのせている人を見たことがあるが、シラスはね、見たことない。「シラスがまつ毛に

### いつか、「まつ毛にシラスを」クルンとしたカレの珍事件

なんて長いまつ毛に

つげなの」と、母親は抱きしめて大笑。学校から帰ってきたA子も一緒にになって、「ひとしきり大笑い」だったという。

シラスならこのまつ毛でもと、過日食卓にあったシラスをのせてみたのである。……ポトリと落ちた。シラスは思ったよりも重かったのだ……。

話を聞いたからには、まつ毛の育毛剤をつけて日々努力しようかな。いつか、まつ毛にシラス1匹、である。

(凜)

「事

故から汲むべき教訓は」と、A男が言った。

4・25JR西日本尼崎脱線事故から数日後のキャンパスである。

「とりあえず、1両目の車両には乗らない、つてことだよ。乗客としてはね。大丈夫なのは6両目以下」

さすがに片道2時間通学生の卓見、ボクもそうする、と周りは同調した。

「なら、女性はどうなるのよ」と声をあげたのはB子である。

「首都圏私鉄の女性専用車両はとも1両目なのよ。痴漢のいな

い車両で、安心して女は死になさい、つてこと？」

と不平を鳴らした。

「うん、まあ、それも問題だね」と、男たちは沈黙した。

「差別だよ、それは」と、おらび立つ声があった。6月初めの「TVタックル」だ。ごぞんじ

田嶋陽子センセイで、事故の教訓ウンヌンとは関係なく、「女はハシッコに乗れ、というのが、差別なんだよ。真ん中に、女性専用車両をもつてきなさい！」というご発言。「そんなりクツがあるか!」と、例

によって侃々諤々にて幕、となったのだったか。

それに比べれば、B子のほうがよほど論理的で筋が通っている。

「よくよく考えてみれば、ヒコーキの全席禁煙もおかしいよな」と、C男が言い出した。タバコなんか吸わないマジメ人間、なのに。

「だってさ、飛行機事故で死ぬのがみんな禁煙派の人間だったら、喫煙派だけが生き残るわけで……」

### JR脱線事故の教訓は——1両目に乗るか、乗らぬか

な死になさい。ボクらは地上で生き残る」

と高笑いする愛煙家のエッセイも読んだ気がする。こうなると、さながら論理ゲームである。

「中をとつて」と中庸派のD男が、そろそろ出番と割って入った。

「合計特殊出生率1・29のご時世だし、やはり女性車両は中ほどに連結しよう。で、ヒコーキは喫煙派も死にたいと言っているんだから、ちよつと許してやろうよ」

カレ、タバコがやめられないクチである。「いや、それは……」となつて、あとは「TVタックル」の趣。

(呂)



# 箱

根駅伝が終われば、次は全国高校サッカー。正月の楽しみである。1月10日の国立競技場——

ことし第83回の決勝は鹿児島実業対市立船橋の対決となった。PK戦の末、鹿児島実業が劇的な優勝を果たした。

熱い熱戦を覚えている人もいるだろう。あのピッチで最後のPKを決めた男、日本一の頂点に立った男が、いま隣にいるんだけどね、と言った

らどうする？ 我ながら、ラッキーというか、なにかフシギな気分。

彼の名前は渡邊辰巳。写真。スポーツ推薦で総合政策学部政策科学

科に入学したのだ。つまりリクラス仲間なのである。鹿児島から上京して、中大サッカー部・南平寮で生活している。

「授業が大変。来るところを間違えたかも」

眠い目をこすりながら、そんなことも言うのだが。彼の生活は、月曜日以外は毎日練習。加えて、慣れない環境での生活、鹿児島に帰りたいと思うこともたびたびらしい。

高校時代を振り返って、

「地獄だった。365日サッカーで遊ぶ時間なし。ともかく大変だったよ。最後の試合で全てが報われたけどね……」。

あの決勝の日。もちろん「人生で最高の思い出」と声が弾む。

全国のサッカーをやっている少年たちが夢見るピッチとはどのようなも

キャンパス

たものな」

決勝のピッチに立った瞬間と同じ、目のかげやきである。「あの試合があつたから、今もがんばれる」と言った。一つの夢を達成した男のさらなる目標。

「大学日本一になること。それしかない」

大学の頂点へ、ボールを蹴りこむ。まずはレギュラーめざして。両腿なんか、ズボンがばちんばちんの頑丈さである。総政にもうひとり、これも日本一に輝く栄光。青木由香。高校（都立国際高校）時代にチアリーダーで日本一になった新1年生だ。大学でも当然チアを、と聞いたら、軽く肩すかし。

「高校時代にチアでやることは全てやったから、大学ではもうやらない、気分」

だなんて。「高校ではずっとチアだけだったし、大学では色々なことにチャレンジしたい」と、そんなことを言っていた。

ところで、5月、全日本選抜大会などへ向けたチアリーダー部演技の校内発表会が開かれた。見に行ったそうである。数日後、

「チアやりたいかも……」という言葉が漏れた。

「でも、やるからには日本一になりたいし」

日本一になる大変さが分かるのである。日本一をめざせば他のことにチャレンジできなくなってしまうかも……。この思いが彼女を悩ませていた。心が揺らぐ。「ソフィーの選択」という映画があつたけれど、18歳の選択は？ まだはつきりとは聞いていない。

ミッドフィルダーとチア。もしも、ピッチで「高校日本一」同士の競演が実現したら、駆けつけたい。授業はさておき、「続編」をお届けしたい。新人記者も場数を踏んで、イキイキとしたレポートを。

(帽)

# 「勝

手に好きでいてもいいですか?」芸人の司会者が言った。真顔で。好きな人をその気にさせる効果的な方法、その極めつけの一言、だそうだ。それを聞いた女性ゲストたちは悲鳴のような声をあげて、その言葉に胸キュンしていた。鳥肌が立った。ただもう気持ち悪くて……。

翌日、「彼氏ほしい」が口癖で彼女いない歴3年・Yと、彼女いる歴1年4カ月・Nが、その話で盛り上がった。Yは、

少しでも気のあ  
る人に言われた  
のならともかく、

## 「勝手に好きでいても……」 「テレビめぐる男と女の大討論」

なるには、内  
面的なパース  
ナリティーを  
第一に、外見

「外見が全く自分の好みでない人から言われてもストーカーのような存在でしかないわよ」とまくし立てた。彼氏がいないのに、よくそんな大口をたたけるわね、と脱帽したくらい。Nは言った。「オレなら、相手には好きにさせといて、自分が好きになるまで一応キープするね」

女が男に言われると「気持ち悪い」、男が女に言われると「ちよつとうれしい」。とかく男と女の間には誤差や落差があるけれど、結論のところ2人の会話はフシギに一致し

た。「でも最終的には相手の外見で決まるんじゃない」「まあ、そうだね」と。

結局、顔なのか?

たとえば、友人Mは元カノのことを未だに忘れられないでいる。彼は新人生の中に元カノの顔に似ている子を発見して、「萌え〜」と言いなからニヤけていた。不気味だ。彼はただ外見、元カノの幻影をその新生に投射していただけじゃないの? 余計なことですけど、人を好きに

なるには、内面的なパーソナリティーを第一に、外見は+αでいどにしてほしい。考えてもください。では、かっこいい、可愛いなんて言われない人はどうすればいいのか。Mに「デブと言われた私、ヨゴレ系のYも……。とはいえ、外見をネタに話は弾むし、第一印象の60%は見えた目、視覚によるらしい。

「見て見て! あの人マジかっこいいんだけど」とYはまたコーフンしている。とりあえずダイエットに励もう、と私ひそかに決意した。

(夏)

# 「私

大学デビューする!!」。入学2カ月前、親友M子は高らかに言った。「やつばさ、大学生からは大人っぽい格好したくない? ヒール履いて、女らしいニツトとか着て。ねえA美も一緒にお姉系大学生めざそうよ!!」

確かに。ただでさえ童顔に悩む私たち……私はM子の計画に同意して、早速お姉さん系雑誌『CanCam』と『J』をゲット。ぼろぼろのジパンからタイトスカートへ。大好きな古着とはフリ

## 「大学デビュー!」 「華やか変身したふたりの変心模様」

朝髪を巻くのはきつい。でもがんばった。しかし学部が違うM子と久

マでお別れして、代わりに薄いピントクのニツトを購入した。そしてバイト代で奮発、ブランドバッグも!! 私たちは2カ月で変身、ナリは上々だった。「もう完璧に大学生じゃない? また友だちに大人っぽくなったって言われちゃった!」

「これで大学入ったら、素敵な彼氏ができるね!!」

みんなと出会った。あれ? みんな古着? スニーカー? お姉さん系はごく少数。

「私たち、頑張りすぎたかな?」「でもこのままでいいこうよ!!」

……現実は厳しかった。ヒールで広い大学内を歩き回るのは疲れる。しかもこの大学の道々はヒールがよくはまる。そのたびに靴が脱げて赤面したり。ぴったりニツトはお腹をへこませてないといけないし、毎

しぶりに偶然会ったとき、なんとM子がスニーカーを履いていた! 裏切り者!!と責める前に、私の足元も……スニーカーだったのだ。

登校初日。髪を巻き、白いニツトにピンクのミニスカ。ヒールで身長は5センチアップ。そして

(直)



先日、久しぶりに高校時代の親友T子に会った。

T子は、一般に“天然ボケ”といわれるような性格で、しかもかなり面倒くさがり。いつも「まあ、何とかなるよ」と言っていて、行き当たりバッタリに人生歩んでる子だった。高校3年生になって、周りが進路に悩んでいるときも、

「今の時代、アジアといえば中国だ！」

という友人の一言で、あっさり中国語学科に進学を決め、ちゃっかり指

定校推薦で合格、キラいな勉強もしなくてすんだ、という経歴の持ち主だ。約半年ぶりの再会に、自然とお互いの近況についての話題になったのだが、T子は、大学進学をきっかけに変わり始めたようだ。

あんなに勉強嫌いだった彼女だが、「せっかく中国語学科に入ったんだから、4年間でちゃんとマスターしたい!!」と、ことしの夏休みには中国に短期留学に行く予定らしい。そのためバイトもして、自分で費用

を稼いでいる。

「中国語の勉強って、結構楽しいし、私には合ってるのかも」

彼女の口から「勉強が楽しい」などという言葉が聞けるとは……と、驚いている私をよそに、T子はさらに話を続けた。

「今年は資格をとるための講座もとったんだ。旅行業務関係の資格んだけど、週に6時間も授業あるんだよ。大学行ったらもっと遊ぶ予定だったのに、超忙しいよ!!」

### 勉強嫌いT子の大変身

#### 「反ロデモがシンバイよ」

文句を言いながらも、彼女の表情は、とつても生き生きしていた。でも、その資格を選んだ理由は、なんともT子らしいものだった。

「それ、国家試験なんだって！国家資格もってたらカッコよくない？」

でね、と続けた。「中国の反日デモが心配なのよ」

もう見上げちゃった。日中問題まで、だもの。私もガンバラなければ。

(鈴)



「電車混み合っておりまーす。次の電車にお乗りくださいー！」と駅員さんの声。

田舎から出てきたE子にとって朝のラッシュは死闘である。彼女の家は1時間に2本の電車が、田園風景の中をゆったり走るような場所。

「信じられない。非人間的環境だわ」と青ざめた顔で彼女が語ったのは通学1日目のことだ。

「電車に乗るときが勝負なのよ」

彼女はこの1週間の経験で得た教訓を教えてくれた。まずは足場の確保。車内に押し込まれた勢いでうっかりスペースを確保し損ねると、大変よ。そう、できれば足と足の間に間隔がある方がいい。カーブの時にしっかり踏ん張らなきゃならないから。次に、カバンは必ず体に密着させてなきゃダメ。押し合へし合いつているうちに、カバンと離れ離れという信じられない事態に陥る。以上が彼女のとりあえずの教訓である。

そして最近のE子の楽しみは電車内の人間観察だ。ある日の電車内。

### 「電車女」の教訓 金魚たちを乗せて走る劇場

ずの作り笑い？ 胸のうちは、こんな地獄に乗り合わせるなんて、と呪いたい気持ちだったでしょうね、さぞかし。

というように、E子の観察眼はとぎすまされて、いよいよあなどりがたい。たとえば、こんな「乗客II金魚論」。

「電車内ではみんな顔を上に向けているのよね。少しでも酸素を吸おうという習性かなあ。なんか口をぱくぱくさせる金魚みたい。ね、そう思わない？」

(和)

「お・は・よ！」

A子はきょうも、とびきり笑顔で声をかけた。朝目覚めてコップ一杯の水を飲み干したあと、向かうのは小さなベランダだ。大きく伸びをすると、明るい日差しが口から飛びこんできて、肺やおなかポカポカとなるのを感じる。

「蒸し暑い日本の夏がなによりも嫌いと言っていたのに」とB子にからかわれたが、「ことしは別よ」と、A子は夏の到来を待ちわびている。

毎朝、「おはよ！」と声をかけずにはいられないもの、それは、かわいらしいミニトマトのことなのだ。

「なーんだ。カレの話かと期待したのに」とB子は落胆したけれど、GW中ふらりと立ち寄った園芸店で、100円で売られていた苗をふたつ購入したのだ。普通のミニトマトとチェリートマトという甘い品種。

トマトの美味しい夏になるとスーパーではケース買いをし、夏休みに旅した北海道では地元の農家の人とたまたまトマトの話になり、裏の畑から抱えきれないほどのトマトをおすそ分けしてもらったこともある。

そんな「トマト姫」のA子にとつては、「自宅で栽培したトマトを食べられる」なんて夢のような話、夏よ来い！早く来い！なのである。

園芸店で苗を見かけて、レジのおじさんに聞いた。

「えーっと、トマトってどうやって育てるんですか??」

勢いにたじろいた風だったが、親切に1から教えてもらった。

「トマトって葉っぱもトマトの香りがするんだ！」

夏よ来い、早く来い！

毎朝「お・は・よ」の赤いもの

苗のときからもうトマト。すくすく育ち花をつけていく。毎朝が発見である。そんな目には、「冬にスーパーにならぶトマトたちがいかに不自然か」と見えてきて」ともいう。最近生産者の顔や名前付きの野菜も多く出回っているけれど、「自分がまず小さな家庭菜園の生産者になってみると、楽しいんだから」と。

手塩にかけたミニトマト。夏がきて、食卓にはボール一杯のミニトマト……を夢見て、A子はせっせと水やり。

(葎)

「えっ、なにに。あー、あれでしょ。知ってる知ってる」

こんな調子で、Aはよく喋る。特技はウンチク。ホントになんでも知っているやつだなあ、と思っていた。しかし、最近、お好み焼きを食べに行つた折、「あれっ、こいつ実はなにも知らないんじゃないの?まさか知つたかぶり?」と疑い始めた。

店に入り、注文をし終わると、いつものように始まった。「お好み焼きは江戸時代末期に庶民が食べ始めたところから始まったんだよ」

「ソースは泥ソース、マヨネーズはカラシマヨネーズでしょ」

……。お好み焼きに関するウンチクが延々と。

「まだ続くの?」「いつ終わるの?」と思いつけて10分。お好み焼きの具がやってきて、早速調理にかかったのもAだった。「あれだけ蓋蓄を語つたのだからさぞかしおいしいお好み焼きが食えるだろう」と、期待はふくらんだ。しかし、どうも

Aの手先がおぼつかない。

「あれっ、もしかして?」「ナニ言つてんだよ。作り方ぐらいい知ってるよ」

グジャグジャ混ぜ終わり、鉄板上へ。ジュー、といい音がした。そろそろひっくり返す時間だ。そのとき、Aは席を立つた。「ちょっとトイレ行つてくるから。やっといて」

「あれっ、もしかして?」。疑惑は増すばかり。ひっくり返すのはけっこう難儀だ。

そしてAが席に戻つたころにはひっくり返つたお好み焼きが鉄板の上に。「おっ、いい感じに焼けてるね。あとちょっとだよ」とAはヘラを奪い、

ソースは泥ソース…ウンチク君はお好み焼きを「口」で焼く

あなたが自分でやつたかのような得意顔。もちろん、ボクがひっくり返したわけである。「ねえ、上から押さないでいいの?」と言つと、「押すと美味しさが半減するから」。キミも知つていたほうがいいよ、という顔でAは講じた。

5分が経ち、ソース、マヨネーズと青のりをかけて、いただきまーす。

「あれっ、中が生っぽい?」  
「いや、ボクらは「半焼きのA」と命名することにした。また向こうで、「あつ、知ってる知ってる」とやっているけれど。こんな人っていない? 周りにき。

(岳)



# 金

曜6限の授業が終わった。きょうE子はこの授業のためだけに大学にきた。いつもならささと帰宅するのだが、この日はその後9時からバイトの友達と焼き鳥を食べに行く約束があるので、このまま少し暇をつぶそうと思った。

「そうだ、Cスクエアでインターネットでもしよう」と、ペデ下の広場の階段を降りているときだった。向こうに、ただならぬオーラをまとった人影が見える。悄然と、明らかに元気がない。階段を登らずに、そのまま階段の裏側に、人影は腰を下ろした。ため息さえ聞こえる風情である。近づいてみると、なんだか見覚えのある顔だ。おそろおそろ声をかけた。「Oちゃん?」。同じサークル仲間である。

「どうしたの、一体?」

「それがさ、自分のどじつぷりにわれながら嫌気がさして」

とOちゃんがぼつりぼつりと語り始めたのは、ついもらい泣きするようなドラマである。

Oちゃんは最近引越しをした。大学3年生にして念願の一人暮らし。3日前、ガスの開栓の立会いがあった

たそうだ。まだ引越し前だったため、Oちゃんは都心の家から下宿先に向かった。ガスの開栓は13時。余裕をもって家を出た。しかし、もうすぐ下宿というところで、「あつ、鍵を忘れた」。急いで大家さんに電話をしたのだが不在。不動産屋にスパキーがないか問い合わせたが、「そういうのは、大家さんが持っている」のだという。とりあえずガスの開栓は不動産屋の手配で、「明日改めて」ということになった。

引越しに間に合えばいいのだし、とOちゃんも鷹揚であった。

次の日ぶじに引越しが終わった。ガスの開栓もめでたく終了。両親が帰り、夕食を買いにスーパーへ出かけた。品物を選び、レジへ行く。「894円です」と言われたその時だった。財布がない!

「すみません、財布忘れしました」  
恥ずかしいやらなにやら、そう一言いって、あたふたと店を出た。

そしてきょうである。授業がなかったOちゃんは学友会に用事があった



あったので、夕方大学にきたのだという。用事をすませて、帰ろうと多摩動物公園の駅へ来て、改札の前で立ち止まった。

「わ、わ、定期がない。えつ、どうして? どうしよう」

行きは確かにあった。大学に行つたのだからね。ならば大学内で落としたのだ。

しかしもう6時をまわっていて、これからまた多摩動物の坂を登り、大

## 悪夢のような引越し 二度あるとは三度、四度

学内を探すのかと思うと、このまま切符で帰りたい。しかし、定期はまだ1カ月分残りがあつた。スイカもチャージしたばかりだった。覚悟を決めて、Oちゃんは「来た道を引き返した」そうだ。

キャンパスは広すぎるが、きょう行つた場所はそんなに多くない。

「きつと見つかる!」と信じて。「神様、お願い」とまで、小さな声でつぶやいたのだそうである。が、定期は見つからなかった。念のため庶務課にも行つた。「届いてませんねえ」と言われた。「がつくりと」気を落

として、「ふらふらと、いまここに座っているの。そういうわけ」。

E子は精一杯励ましたのである。「うまくいかないことは時に重なるものよ。私もそういうことがあるよ」などと。しかし、こうも2度も3度もはないけどな、と思いつつも。ともあれ元気出しなさいよ、と話していたら、Oちゃんのケータイが鳴つた。

「はい、ハイ」。Oちゃんははじかれたように立ち上がり、みるみる笑顔になった。

多摩動物公園駅からの電話だったのだ。

「定期券が届いているので取りに来てほしい」と、奇跡のような。

Oちゃんは、あれから少しは気をつけているみたいだが、成果が出ているのかは定かではない。

先日、就職ガイダンスで受けた適性テストの結果が返つてきた。人のいいOちゃんは、診断結果の一部をE子に見せてくれた。こんなふうにかかれていた。

「日常生活での判断力、注意力が不足気味です」

がんばれ、Oちゃん!

ツ、ツ。こちらMです……。あれ、つながつてないのかなあ？ まあいいや。

突然ですが、ワタクシ、パン屋でバイトを始めました。「いらっしやいませ、コンニチハ」なんてへんなマニユアル言葉は使わなくていい、小綺麗なお店。でも、失敗はしょっちゅうです。急ぎのせかせかしたお客さまに、「ごゆっくりどうぞ」と言ってしまったり、疲れてこっそり飲もうとしたオレンジジュースをぶちまけて仕事を増やしてしまったり。

いろんな人がひっきりなしに訪れます。一杯のコーヒーに砂糖7本も入れるMs甘党、すぐに灰皿をいっぱいにしてしまうお疲れサラリーマン、カウンターに背が届かず顔の見えない小さな小さなお子様……。

なかでも私が大好き(?)なのは、過剰包装を過剰に拒む常連のXさん。「大きな袋はけっこうです」と、いつもMy bread bagを手にしていらっしやる。パン屋では、クリームやバターでベタベタに汚れるのを防ぐため、個包装してから、さらに大きな袋にまとめます。でも、Xさんは何個もパンを買うときも、個包装

### 「パン屋でバイト中」 マイ・バック「X」氏の絶対命題

ます。いま飲んでいるアイスコーヒーのストローも、コッ

さえ「できるだけ少なめに」なのです。実はこのようなXさん、意外にたくさんいらっしやいます。ごみの減量化に対する意識が高いのでしようね。ワタクシの住む横浜市でも、4月から、ごみ3割減へ分別収集がスタートしました。

「あープラだー」「これもプラだー」。いえ、ブランド名を連発しているわけではないんです。プラスチックごみの多さときたら……分別してみても初めて気づきました。一体こんな必要なの？と思ってしまう

プのフタも、別になくても味は変わらないのだし……。  
学内のマックで、Cスクエアで隠れXさんが増加することを祈ってます。

ツ、ツ。あれ、やっぱり聞こえていないのかなあ？ まあいいや。宇宙船地球号の乗組員の独り言にございます……。

(明)



3限が始まり、食堂で昼食をとりに始めた。昼休みは非常に混雑し、落ち着いて食事ができない。それで3限が空いている日は、友人と遅めの昼食をとる。

A子が急にこう言った。  
「ねえーちよっと聞いて！ 昨日、美容院に行ったんよ」  
髪型・髪色が変わっていた。朝、気付いてほめたばかり。

「でね、三十路近くに見られたんだけど！」  
「えっ!? マジで!? 何があったの？」

明らかに、聞いて欲しいそうなので聞いてみた。

### 「ねえ、聞いてよ」 社員旅行はどこへ？の大問題

気が済んだようで、やっと思いだしたように、ラーメン

「A子さんの会社、社員旅行どこ行くのですか？つて美容師に聞かれたの。社会人に見られたんだけど!!」

A子はよくいえば大人っぽい。言い方を変えれば老けているので、納得である。

「それでね!!」  
A子のテンションは、MAXへ向かう趣だ。気になる……話して夢中で、A子のラーメンは

冷めるばかりである。湯気がどんどん少なくなっている。「あの、ラーメンが……」と言ってあげたいが、だれもA子を止められない。聞こえない。

「大学生です！つて言ったら、俺より年上だと思いましたが、つてこうなのよ。でね、その美容師がいくつか気になるじゃん！それがさ27歳なの!! あり得ない」  
と言って、ハハハハハ。その笑い声が、大学生っぽくないの。どこか艶を含んだような。

の箸をとったのだけれど……。  
「ラーメン冷えちゃつてるんだけどー！ 冷えるの早くない!? ちゃんと熱々にして欲しいよね」  
こんどは文句である。これは、女子大生丸出しの口ぶり。ラーメン冷えたの、誰のせいだっけ……？

A子が三十路近くに見られたのは、見た目だけの問題ではないナ。話し方とか仕事とか、要するに、その全体。美容師さん、あなたは間違っていないよ。見る目の確かなカリスマジやないかしら。

(ん)